

た。小鳥屋にも三月の野にもなつかしい思を引かれた。

彫刻で老ひと言ふのを見た時今までのどにつかへて云ふ事が出来なかつた自分の感じが、すら／＼流れ出る様な気がした。老いは人間の間に是非来ればならぬ悲惨な出来事の一である。

呑氣さうな狩衣の胸を、思ひ切りふくらませて、空を仰いで居る小さな木彫の大空は見ても清々するものだつた、薄彫の秋は長いこと見た全体から来る落ちついた感が沁み通る様に感じた。何國の國の人さと思はれないだけ、親しみ深く眺められたのであつた。

生れて始めて文展を見、而も素通りした丈であるから何も言へる筈がない。始めて文展といふ名を開かされたのは、小學校の高等一年の時だつた、「百姓が作つた米を食ふ」と同じ理窟で俺も東京へ行つて来た」とその先生は吹聴さも辨解さもつかぬ口調で話された。

その時黒板に描かれた豆の秋の略圖横山大觀といふ名前「若き日の影」といふ彫刻の名前許りが今もはつきりと思ひ出される。

あゝ長いこと待ちあぐんで居た日が貧しい如上の印象のみで終つた事が限りなく又物寂しい。



#### □鉛筆の削り方

專一

木曜日の晝休みの時間、「外へ出ませうか。」と私がさそひに参りました時、茂さんは鉛筆を削つていらつしやいました。それで私はそれがすむ迄待つつもりで、机のそばに立つて茂さんの手許を見て居りました。

小學校の生徒が手工の時によく使ふ切出しの、あまりよく切れさうもないので、力いっげいっげつていらつしやいました。何だかごつ／＼といふ音がしやうな程、一つ一つ大げさに力が入つて、部厚な赤び茶色のけづりかすがポツリポツリ白紙の上におちてゆきました。

如何にも器用に鉛筆を削る方がよくあります。小刀のあさを美しく揃へて、削り始めから心の尖までがなだらかにすらりと細つて行つて居る様なけづり方を手にして、「ほんのかりそめのものさはいひながら、」と感心した事もございました。

所が切出しの厚い刃でえぐられる様に削られてゆく茂さんの鉛筆の先は、いかにも珍らしい形になりました。「なんだかつむじを巻いて居る様な形。」といつて二人は笑ひました。笑ひの中に鉛筆はごろりと筆箱の中にごろがされました。

熱心なまじめな、ごく真すぐなこの友の平生の心持が、ほんのこの鉛筆の削り方にも確かにあらはれてをります。殊に五分位ひよろ／＼と出た心が、またその人の飄逸さいふ様な趣をよくあらはして居ります。

誰一人としてこれと全く同じに鉛筆を削る事は出来ずまい。茂さんの鉛筆を私にあげ／＼と眺めて、まことに面白く感じました。

### 向ひの岡

尾上柴舟

夕靄はしづかにわたれひとりわが向ふ岡への草をよこぎり  
麓には紫のきりかゝりたり日の入り方を山にきたれば  
残る菊うつぶす土のま黒きに霰まろびて冬ふけにけり  
冷えし身をさつとひたせば風呂の湯の少しこぼるゝ音もよろしき  
清らかに身に沁みわたるこゝちする湯あがり後の足<sup>あな</sup>うらのひえ  
彼の岡を半出でたる月の前草のなびきのほの見ゆるかな  
うす青き斜面の麥に乏しくも光投げ居り峽に入る日の  
風絶えぬ木だに草だに落葉だに動かず暮は悲しきものを  
鳥去にし庭の青木の葉のかげり重たく見えて夕さりにけり  
かぐろなる岡を人ゆく何事か夕日の前をうたひ人ゆく